



学年団を訪ねて

進路指導ストーリーの共有を徹底 大所帯でも「温度差」なし

北海道・私立札幌光星中学校・高校 高3学年団

大学入学共通テストの実施を始めとする様々な制度変更がある2021年度大学入試に、生徒も教師もどのように向き合えばよいのか—具体的な情報が少ない中、学年主任の三浦先生が重視したのは、一つひとつの教育活動の目的を学年団で共有すること、そして生徒への重要なメッセージを、15クラスすべてにおいて同じ熱量で伝えることだった。



直面した課題

◎三浦学年団は、生徒数が過去最多の約550人、クラス数が15となる中、同学年団に参加した教師には、担任経験の豊富な教師が少なかった。

◎大学入学共通テストの導入など、高大接続改革が進む一方で、各大学の入試の具体的な内容が見えず、手探りの状態で進路指導をスタートしなければならなかった。

学校概要

「地の塩、世の光」を校訓とし、キリスト教の教えに基づいて、他者の幸せのために力を発揮でき、世の中をよりよくしていける人材の育成を目指す。中学・高校での学びは将来、平和で豊かな社会をつくり上げるために生かされることを生徒に繰り返し伝えながら、生徒一人ひとりの志望を実現するため、希望進路に合ったコース分けと少人数制指導を取り入れたきめ細かな教育を行う。フェンシング部、ゴルフ部、テニス部などは、全国大会出場経験を持つ。



設立 1934 (昭和9)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 3学年約1100人 (高校)

2021年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、旭川医科大、北海道大、東北大、筑波大、大阪大、札幌医科大などに163人が合格。私立大は、上智大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大、関西大などに合格。

伝えるべきメッセージを 同じ熱量で全生徒に伝えたい

北海道・私立札幌光星中学校・高校の2018年度・高校1学年団は、それまでの学年団とは様々な点で異なるスタートを迎えていた。同校への入学志願者の増加により、高校1学年は15クラスと過去最多、担任15人のうち、高校3年生の担任経験のない教師が7人で、うち5人は担任そのものが初めて……。21年度大学入試から実施される大学入学共通テスト（以下、共通テスト）の受験生を育てる学年団のリーダー、三浦利文先生は、「3年間かけて生徒がどのように育っていくのか、私たちはどのように生徒を支援すべきなのか、そのイメージを、まずは学年団で共有したいと思った」と振り返る。

「初担任の先生が多いことは、あまり気にしていませんでした。誰でも『最初』はあるわけですから。気がかりだったのは、クラス数の多さでした。共通テスト対策やポートフォリオの整備、さらに探究学習など、学年団として取り組むべきことが山積する中で、各大学の入試の具体的な内容がまだ見えていない状況でした。だからこそ、浮き足立つことなく、どのように生徒を成長させるのかを、一つひとつの教育活動の目的とともに、しつ

かりと学年団で共有したいと考えました」

まず、三浦先生は、職員室の机の配置を変えるところから始めた。学年主任で英語科の三浦先生の近くには、外部検定試験対策を始めとする新たな課題に直面していた英語科の教師の席を配置し、いつでも気軽に話ができるように配慮するなど、同校の慣例と異なる配置を検討した。

各担任に持ち味を發揮してもらいながら、大所帯であっても、学年として伝えるべきメッセージは全生徒に同じ熱量で伝えたい。特に進路指導においては、担任間で温度差があると、3年後、生徒の進路意識の差も大きくなり、「団体戦」として受験に向き合うことができないことは、経験を通して分かっている。生徒の希望進路実現に向けて、教師と生徒が一丸となって歩むための羅針盤が必要だ……。そう確信した三浦先生が3年間を通して重視したのが、学年集会と学年通信だった。

学年集会と学年通信を通じて 進路実現のストーリーを描く力を育て

1学年時、学年集会は毎月1回、時間割に組み込まれて必ず実施された。生徒にメッセージを伝えるのは、学年団に所属する教師の1人であり、進路・学習指導部にも所属す



学年主任に聞く！ 7つのQ&A

- Q** どのようなチームを目指しましたか？
A 先生方に安心して仕事をしてもらえるチームです。
- Q** リーダーとしての信念は何ですか？
A 先生方に任せて、思い切りやらせてもらって、責任は自分が取る、です。
- Q** 学年団としての「成功」は？
A もちろん、生徒全員が希望進路を実現することです。
- Q** 学年主任として自覚する
A 長所は何ですか？
A 難しいなあ……。細かいことはうるさく言わないところ、でしょうか。
- Q** 学年主任として自覚する
A 短所は何ですか？
A 集中している時に声をかけられると、対応が素っ気なくなってしまうことがあるようです。
- Q** 学年団を迎えた最大のピンチは？
A コロナ禍で臨時休業になったことです。
- Q** この学年団は
A どんなチームになりましたか？
A 若い先生に安心して任せられる、とてもよいチームになりました。

る中村大輔先生の役割だった。

「1か月後、3か月後にどうなるべきか、目指す状態から逆算して、この時点までにこうなっておこうと、生徒に、そして先生方に訴えました。担任が目の前のことに精いっぱいになってしまふのは分かりますが、進路指導という視点に立った場合、誰かが先を見通した発信をする必要があります」（中村先生）

学年団の1人、高澤昌稔先生は、「『ストーリー』という言葉の中村先生はよく使っていた」と、学年集会の様子を振り返る。

「目指す状態にたどり着くために自分はどうな道歩いて行くのか、進路実現のためのストーリーを描けるようになることが大切だと、中村先生は生徒に伝えていました。未来を今に引きつけて、一つひとつの活動が何のためにあるのかを理解して取り組むことの重要性について、私自身も理解を深めました」

目指す状態からの逆算がない指導は形骸化すると、中村先生は断言する。

「例えば、学習記録表や活動ごとの振り返りシートも、提出することが目的化すると、生徒は熱心には取り組まなくなります。なぜ今この活動に生徒が取り組むのか、この活動は1年後、2年後にどうつながるのかという進路実現のためのストーリーを教師が理解した上で、各クラスや生徒の実情に合った運用をしてもらいたいと思いました」

図1 学年団発行の学年通信（20年2月発行）



学年通信を書く際に中村先生が心がけたのは、「こうでなければいけない」と教師の考えを押しつけるのではなく、「あなたはどのように考えますか?」と、答えを生徒自身で出させる姿勢だ。教室では、生徒が学年通信の内容について語り合う様子も見られた。※学校資料をそのまま掲載。

週に1、2号の頻度で中村先生が執筆してきた学年通信も、生徒、教師の目線合わせのために欠かせないものだった。

「15人の担任を通して聞こえてくる、その時々々の生徒の言動に対する学年団としての思い、考えを書きました」（中村先生）

20年2月に発行された学年通信第62号では、中村先生は「塾・予備校に行くか成績が上がるのか」と生徒に問いかけた（図1）。3年生0学期を迎え、受験に対して焦りを感じたためか、塾や予備校に通うことを検討する生徒が現れ始めたからだ。学年団の1人、

津川容子先生は「当時、進路実現のためのストーリーを自信を持って描けなくなっていた生徒に必要なメッセージだった」と振り返る。

「第62号に記されたのは、安易に塾・予備校に依存するのではなく、『自分が今、取り組むべきことを自分で把握しよう』という、それまでも大事にしてきたメッセージでした。この学年通信の配布後、新型コロナウイルスの感染拡大により、臨時休業になってしまいました。自宅で1人で勉強しなければならなくなった生徒に、学年通信のメッセージは大きな意味を持ったと思います。臨時休業



学年団を訪ねて



高澤昌稔 たかさわ・まさとし
教職歴8年。同校に赴任して8年目。
進路・学習指導部。英語科。



津川容子 つがわ・ようこ
教職歴10年。同校に赴任して10年目。
生徒指導部。英語科。



中村大輔 なかむら・だいすけ
教職歴15年。同校に赴任して15年目。
進路・学習指導部副部長。地理歴史・
公民科。



三浦利文 みうら・としふみ
高3学年主任
教職歴17年。同校に赴任して17年目。
進路・学習指導部副部長。英語科。

は、生徒にとって、あるべき学びができるかどうか、実践する機会にもなったはずです」
たくさんの書き込みが入った学年通信を、一冊にまとめた自身のファイルを手にも、高澤先生は「学年通信の内容を、生徒が理解しきれていないと感じた時は、自分なりの言葉で補ったり、生徒に質問して理解を促したりしました」と振り返る。三浦先生は、「生徒が3年生になる頃には、私が伝えたいことが、担任を通して確かな熱量を伴って生徒に伝

わっていると、手応えを感じるようになっていましたし、『これは大事だな』と私が思っていることについて、私が説明する前に先生方から質問や確認が来るようになりました」と、学年団の成長を語る。

学年団の教師が 互いの授業に足を運ぶ

学年団の結束が強まる中で、津川先生、高澤先生は、学年団の教師に自分の担当する英語の授業の参観を呼びかけるようになった。スピーキング指導に力を入れている2人の授業では、普段は発言が少ない生徒も、発表の際には堂々と英語で話す姿が見られたことから、各担当が担当する授業の中とは異なる生徒の姿を見て、生徒を多角的に理解する機会にしてみたいと思ったからだ。次第に、津川先生、高澤先生以外の学年団の教師の授業も見に行く教師が増え、生徒の様子が学年団での会話の中でそれまで以上に語られるようになった。

20年度、初めて3年生を担当した津川先生は、「同僚の助言に勇気づけられた」と語る。「共通テスト受験後の個別入試への出願について、学年団の先生方から、『全体に対する声かけは、よい結果が出ることを前提に行う

分、個々に対するフォローは、一人ひとりに寄り添って丁寧に行っていたいこう』『入試本番を迎えたからこそ、志望大学の可否の先にある、その生徒が目指しているものを大事にしていこう』と、助言をいただきました。私なりに自信を持って3年生に向き合えました」
学年団のスタート時、全国規模の模擬試験の成績が、過去5年間で一番振るわなかった生徒たちは、21年度入試において、過去最多の国公立大学現役合格者数を記録するまでに成長した。約550人の生徒たちは、それぞれの進路実現のためのストーリーを描き、それを実現したのだ。

* 学年団 輝きのポイント *

- * 生徒に同じ熱量でメッセージを伝えることを重視
- * 生徒の成長や進路実現を逆算したストーリーを学年団で共有
- * 学年集会、学年通信で、生徒の状況に合ったテーマを発信

※プロフィールは、2021年3月時点のものです。